

# 「文化・スポーツ交響体」の実現にむけた 学社融合型文化・スポーツクラブの可能性に 関する事例研究

法用 邦義

学校と地域社会の連携・協働が長きにわたり求められている。事実、学校と地域社会の連携・協働は、1949年の「社会教育法」の成立を皮切りに今日に至るまで、学社連携・融合に向けた答申や提言がなされている。しかし、学校と地域社会の連携・協働は遅々として進まず、例えば文部科学省は、2005年度より、学校運営に地域住民や保護者の声を積極的に反映させる学校運営協議会制度の推進を図っているが、2021年にこの制度を導入している学校は約33.3%(11,856校/35,571校中)であり、十分に普及・理解が進んでいるとは言い難い。それどころか、学校・教員の不祥事や子どもの学力低下、保護者や地域住民とのトラブルの急増などによって、学校と地域社会の信頼関係はいまや危機的状況にあると言わざるを得ない。このままでは、お互いの教育的機能が大きく低下し、子どもを育てる土壌が崩壊していくと言っても過言ではなからう。

それでは、いかにすれば学校と地域社会は連携・協働することができるのであろうか。本研究では、このような問題意識に基づいて、本来の学校と地域社会の関係性を学制発布以前に地域社会の教育機関として存在していた、「番組小学校(京都市)」と「郷中教育(薩摩藩)」の吟味に加え、文部省(1992)が編纂した『学制百二十年史』とオルセン(Olsen, 1945)による『学校と地域社会』(コミュニティ・スクール論)に依拠し、学校と地域社会の「協働共生」の現代的意義を歴史的視点から考察した。

また、学校と地域社会が連携・協働する社会とはどのような社会であるのかについて、見田(2021)の「交響体(多種多様な人々が、あらゆる喜びと感動に基づいた交歓する他者と、協定やルールに基づいた他者との関係によって成立する社会)」概念を吟味し、人々の交歓関係を生み出す媒体が、人間の文化的活動(スポーツ・芸術・学問など)であると捉え、「文化・スポーツ交響体」概念を提示するに至った。

さらに、「文化・スポーツ交響体」の実現を「Club」概念の再検討より考察し、学校と地域社会の人々による「文化・スポーツ交響体」の実現には、「学社融合型文化・スポーツクラブ」としての組織が必要であると結論づけた。

そのため、本研究では、「文化・スポーツ交響体」の実現にむけた学社融合型文化・スポーツクラブの特徴を明らかにすることを目的とした。

したがって、研究方法には、質的研究法を採用し、3つのクラブ・団体(H 倶楽部・Y クラブ・A コミュニティ)に対するインタビュー調査から得られた口述と提供資料を分析することによって、学社融合型文化・スポーツクラブの様相を明確にするとともに、その特徴を検討した。

その結果、H 倶楽部は、学社融合型文化・スポーツクラブとして5つの特徴が示唆されたが、設立2年という短期間での活動のため構想段階にとどまっているものもあり、文化・スポーツ交響体にむけた発展途上の段階にあることがわかった。

これに対して、Y クラブは、学社融合型文化・スポーツクラブとして5つの特徴が示唆され、その役割を十分に果たしており、文化・スポーツ交響体としての社会が実現されていることが明らかになった。

一方で、A コミュニティは、H 倶楽部やY クラブのように、文化・スポーツ交響体の実現へむけた学社融合型文化・スポーツクラブとしての特徴を十分には有していない状況が把握された。

このような事例を比較・検討した結果、「文化・スポーツ交響体」の実現にむけた学社融合型文化・スポーツクラブには、①地域社会(もしくは学校)との「協働共生」意識、②多種多様な人々の共感的コミュニケーションの場の創出、③学校と地域社会の資源共有による総合的な事業展開、④学校と地域社会間の「連結ピン」としての役割、⑤ソーシャルキャピタルの向上といった5つの重要な特徴が示唆された。

しかしながら、事例検討であったため、それらの一般化には至らなかった。今後は、定量的な調査による学社融合型文化・スポーツクラブの特徴の分析に加え、学校と地域社会の双方向からの調査・検討が必要であろう。